

じ ちよう
地 黄 町

豊作祈るスミツケ祭

漢方で補血強精剤とされる薬草・サオヒメの根茎を地黄（じお）といい、これを盛んに作ったことから当地名が生まれたようです。

地名の初見が鎌倉時代・永仁二（一二九四）年の東大寺文書ですから、このころ地黄が栽培されていたことが分かります。ところが、地黄村と呼ばれた江戸時代の観光案内「西国三十三所名所図会」には、同地について「今ハさらに地黄をつくることなし」とあり、すでに栽培が途絶えていたようです。

明治一七年の「農産物取調表」を見ますと、米・裸麦・そら豆・綿などが村の主産物で、同二二年に真菅村の大字となったあと昭和三一年一〇月に「檀原市地黄町」となります。古くから同町の西浦に鎮座する「人麿神社」では、万葉歌人の柿本人麻呂を祭っており、神社本殿が昭和五四年に国の重要文化財指定を受けました。

毎年五月四・五日に行われる豊作を祈る墨付祭（すみつけまつり）では、村の子どもたちが田やあぜ道を駆け回り、真っ黒になるまで墨の付け合いをします。大人たちが藁（わら）で雄雌の蛇を作り村中を持ち回る野神祭（のがみまつり）もあり、いずれも近隣で有名な祭りとなっています。